

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：23804

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520716

研究課題名(和文)文法形態素習得難易度における「注意」の役割

研究課題名(英文)The role of Attention in the 'Acquisition Orders'

研究代表者

横田 秀樹 (Yokota, Hideki)

静岡文化芸術大学・人文・社会学部・教授

研究者番号：50440590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円、(間接経費) 180,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、文法形態素習得において「注意」は、意識的・無意識的に関わらず何に向きやすく何に向きにくいのか、またその中でも何が優先されるのかを明らかにしようとした。結果として、統語範疇の中でも、普遍的要素は意識的に注意を向けなくても最初からほぼ完全に習得できるが、言語によってパラメタの設定値が異なる要素に関しては、誤って第一言語の値を当てはめようとするため誤りが起こる。しかし、習得のためには後に徐々に修正していく(意識的に注意を向ける)必要があることが示された。この結果は、the Feature Reassembly Hypothesis (Lardiere, 2009)を支持するものである。

研究成果の概要(英文)：This study reports on what Japanese learners of English (JLE) direct their attention to consciously or subconsciously. I discuss that universal constraints operate in early JLEs interlanguage grammars (they need not pay attention to them consciously), and that they 'subconsciously' transfer L1 setting for parameterized constraints in L2. Accordingly the wrong settings require gradual correction (the learners need to turn attention to them consciously). The results are broadly consistent with the Feature Reassembly Hypothesis (Lardiere, 2009).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得理論

1. 研究開始当初の背景

文法形態素習得難易度の存在は広く認められるところではあるが、その決定要因に関する説は Goldschneider & Dekeyser/G&D (2005)が有力とされながらも、その説明には「予測力」がなく(Brown 2001)、そのメカニズムの解明とまでは言い難いものであった。また同時に、G&D(2005)は、Luk & Shirai (2009)が指摘するように「転移」が考慮に入れられていない点も問題であった。したがって、本研究では、転移を含めて決定要因を見直すこととした。さらに、Dulay, Burt & Krashen (1982) において習得順序(難易度)が示されている wh 疑問文の助動詞 do の習得にも注目した。

以上の背景を踏まえ、Syntactic category に点を当てて調査を行った。加えて、形態素の習得順序は明示的指導によって変えることはできないということが指摘されているが、文法項目すべてがそうだと言えるのかも併せて検討した。

2. 研究の目的

本研究は、文法形態素習得難易度の決定要因を詳しく分析すること、また習得順序を明示的指導によって変えることができる可能性についても同時に調査することを目的とした。G&D(2005)では5つの決定要因を挙げたが、上述したように「予測力」の欠如と転移を考慮に入れていない点で問題がある。そこで、本研究では、日本人英語学習者にとっては(正の)転移が含まれるとされる所有格-'s、さらには統語範疇と音韻のレベルに分けて考えることができる wh 疑問文の助動詞 do をターゲットとした。

「気づく」とは、学習者は何に気づきやすいのか、また気づきにくいのか、そして、そのような差が出るのは何が原因かを特定するために、Syntactic category およびその周辺との関連を中心として実験・調査を行った。

3. 研究の方法

主に大学生を対象として、誘出タスクおよび文法性判断タスクを用いて、調査を行った。

4. 研究成果

英語を第二言語(外国語)として学ぶ場合、学習者の母語や教室での指導の有無に関わらず、文法形態素の習得にはおおよその順序があることが観察されているが、日本語母語話者の場合、英語の所有格-'s は習得が比較的容易であるという傾向が見られる。そして、その要因として日本語の所有格-(例: ジョンの本)からの英語-'s への転移(例: John's book)が指摘されている(寺内 1994; Luk & Shirai 2009)。しかし、本来言語学的には、日本語と英語の所有格の統語構造は異なると考えられている(Bošković 2002, 2008; Chomsky 1994)。本研究の実験および調査結果から、日本語母語話者である実験参

加者の多くは、英語の所有格の統語構造を利用できているわけではなく、むしろ日本語の所有格の統語構造を英語に当てはめて使っているだけであり、本当の意味での英語ネイティブ・スピーカーと同じ文法を習得しているとは言えないことが示された。例えば以下の(1)の日本語は許容できるが、(2)の英語は日文的である。

- (1) このジョンの本(は面白い)
- (2) *this John's book

しかし、日本語母語話者の実験参加者は(2)のような文を誘出タスクにおいても産出し、文法性判断においても許容することが分かった。

したがって、日本語母語話者にとって英語の所有格-'s の習得は、先行研究で言われているほど容易ではないことが示唆される。そして同時に、日本人英語学習者が英語の所有格の習得が容易である理由として提案されていた日本語からの「正の転移」による説明も、表面的な事象を説明しているにすぎず、今回の統語面も含めたデータを考慮に入れるとむしろ日本語の所有格の統語構造を英語に当てはめる「負の転移」が働いているとも考えられる。つまり、表面的に似ていることで英語の真の構造を習得する妨げとなっているとも言える。さらに、この結果は、自然産出データのみに基づく文法形態素習得研究に以下の問題を提起することになる。つまり「文法形態素習得順序(難易度)」は、何をもち「習得」とすべきかという問題である。それを問い直すには、形態素習得順序(難易度)の研究において、言語の表面的な音だけでなく統語構造面も考慮に入れ、自然産出のデータの観察だけではなく文法性判断や誘出タスクなどを利用して再検証する必要がある。

指導面に関しては、所有格の以下の5つのタイプの指導を行った。

- a. [生物's タイプ]
Her brother's name is Jack.
- b. [father-in-law タイプ]
This is my father-in-law's house.
- c. [無生物 of タイプ]
The roof of his house is red.
- d. [限定詞タイプ]
This book of Tom's is interesting.
- e. [省略タイプ]
He is staying at my uncle's (house).

その結果、その明示的指導の効果は、短期的には概ねすべてのタイプに効果があり、長期的にはdとeには効果があるが、他のタイプは効果が持続しないことがわかった。

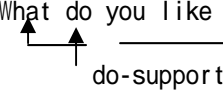

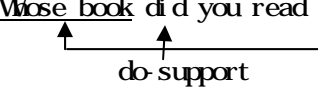
次に、wh 疑問文の助動詞の習得に関してであるが、Dulay, Burt & Krashen (1982) pp.128-130 で観察された順序では do の習得

が困難であることが示されている。理論上、wh 疑問文の do は、PF (音韻部門) で行われる形態的操作であることが主張されており (e.g., Chomsky 1999; Radford 2004)、さらに、第二言語習得研究分野では、形態素と音韻間のインターフェイスが難しく、シンタクスと意味のインターフェイスは比較的簡単であることが指摘されている (Goad & White 2004, 2006; White 2009 他)。以上のことから、同じ wh 疑問文でも、do が必要なもの(3)と、他の助動詞(例:will)を使ったもの(4)の習得を比較調査した。

- (3) What did you eat?
 (4) What song will you sing?

結果として、do を挿入する必要がある wh 疑問文の方が圧倒的に困難であることが示された。

さらに、指導面においては、wh 疑問文には、以下の4つの操作を指導する必要がある。wh 語を文頭に置くこと、wh-object question には do-support が必要、wh-subject question に do-support は不要、wh-pied-piping(随伴)が必要 (例: Whose book)。

- (5) wh-object question
 e.g. What do you like ?

 do-support
- (6) wh-subject question
 e.g. Who bought the diamond?

- (7) wh-pied-piping question
 e.g. Whose book did you read ?

 do-support

これらの明示的指導の結果、 に効果が見られたが、 には効果がなかった。一方で、 と は指導の有無が関係しないことがわかった。

本研究をまとめると、文法形態素習得において「注意」は、意識的・無意識的に関わらず何に向きやすく何に向きにくいのか、またその中でも何が優先されるのかを明らかにしようとしたが、結果として、統語範疇の中でも、普遍的要素は意識的に注意を向けなくても最初からほぼ完全に習得できるが、言語によってパラメタ の設定値が異なる要素に関しては、誤って第一言語の値を当てはめようとするため、誤りが起こる。しかし、習得のためには後に徐々に修正していく(意識的に注意を向ける)必要があることが示された。この結果は、概ね the Feature Reassembly Hypothesis (Lardiere, 2009) を支持するものである。

5. 主な発表論文等
 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

- [雑誌論文](計3件)
 「<正確さ>と<流暢さ>を共に育てる文法指導とは」『英語教育』2013年10月号 00.19-21 横田秀樹
 「文法形態素習得における所有格-'s の難易度」『金沢学院大学紀要』第11号、pp.145-152, 2013年 横田秀樹
 「SLAの視点から考える していい「引き算」避けたい「引き算」」『英語教育』2014年2月 pp.26-27 横田秀樹

- [学会発表](計5件)
 「所有格の習得における明示的指導の影響と効果」大学英語教育学会 第50回記念国際大会シンポジウム「異なる文法項目への明示的指導の実証的研究」2011年9月2日 西南学院大学(福岡県) 横田秀樹
 'Clausal pied-piping in long distance wh-chains by Japanese learner of English' Poster Presentation, The 21st Annual Conference of the European Second Language Association (EUROSLA 21) 7-10 September 2011 Stockholm University in Sweden. Hideki Yokota.

- 「文法形態素習得における所有格-'s の難易度」全国英語教育学会 第37回全国英語教育学会山形研究大会 8月20日 山形大学小川川キャンパス(山形県) 横田秀樹
 「英語の Do-support と Subject-AUX inversion の習得」J-SLA 夏季セミナー 2013年8月22日 八王子セミナーハウス(東京都) 横田秀樹
 'Acquisition of DO-support and AUX-inversion in English wh-questions by Japanese-speaking Learners of English' Poster Presentation, 28-31 August 2013 in Amsterdam, The Netherlands. Hideki Yokota.

- [図書](計1件)
 『英語教育の素朴な疑問 考えるときの「思い込み」から考える』くろしお出版 2014年6月 柴田美紀・横田秀樹

- [産業財産権]
 出願状況(計 0件)
 取得状況(計 0件)

- [その他]
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横田 秀樹 (Yokota, Hideki)
静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授
研究者番号：50440590

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし